冬至

近くの銭湯の前を通ったら『お風呂祭り―六月二十日は柚子（ゆず）湯です。是非お越し下さい』との張り紙を見かけた。冬至に葉ゆず湯がつきもの。ゆず特有の香りを一杯に吸い込みながら湯船にひたり、湯あがりに冬至のカボチャを食べれば風邪もひかずに無病息災間違いなし。

暦の上では春分，秋分が季節の中間点であり、冬至は夏至とともに折り返しの中間点である。東京での日の出が六時四十七分、昼間の長さが十時間と夏至に比べて約5時間も短い。北へゆくほど短くなり、根室では東京よりさらに一時間も短く、北緯六十七度より北ではついに太陽が顔を出さない。

冬至を過ぎると、それまで短くなってきた昼間ガ長くなり始めるので「一陽来復」とよんでいる。しかし部屋に差し込む日差しの伸びは畳の編み目を数えるくらいしか伸びてこない。暦の上で冬野季節の折り返し点だが、これからが冬の寒さの本番、〝冬至冬なか冬はじめ〟である。

北半球が冬至のときは南半球は夏至である。南極昭和基地では白夜の世界が続き四十日もの間太陽が沈まない。真冬どきには氷点下を超す四十℃の気温を経験した越冬隊員は夏の最高気温０℃がとても快い気温に感じる。これに対して、十一月に日本を出発した新しい観測隊員は一カ月の船旅で晩秋の北半球ら常夏の赤道を越え、初夏の季節の南半球の寄港地により氷山の浮かぶ南極海へと、季節にして一年分を経験してしまう。夏とはいえ流氷の浮かぶ海は冷たく日本冬より寒い。赤道付近でシャツ一枚、半ズボン姿ガ南下とともに一枚また一枚と重ね着となる。

かくして初荷とともに昭和基地へ飛んだ新越冬隊員と出迎える旧隊員との感激の初対面は、雪焼けしたひげ面の男たちが薄着で腕まくりした姿で、かたや防寒服で着膨れした新隊員が駆けよるというシーンとなる。体感温度のマジックによるものである。

こんな情景とともに日本列島に四季折々の彩りを与えてくれるのも地球の自転軸が約二十三度傾いているからででもある。

一九八七年　一二月　一九日